

すてにして記憶の厩舎に嘶けりあかるくあをき武彦  
の馬 峰尾 碧

二〇一〇年に他界した日本画家・毛利武彦の馬の絵である。今月の一連によると、最近知った毛利武彦の絵に惹かれて、彼のことをネットでいろいろ調べたらしい。この一首、出逢ったばかりの絵の馬が、自分の記憶のなかにある厩舎に入り、すっかりなじんでご機嫌に嘶いたりしている、という意味だろう。出逢ってすぐの絵の大ファンになった個人的事件を、みごとに映像化し一首にしあげた佳作。

海面を滑りゆく夏 海面は前の年よりも輝いていた  
齋賀万智

今月のこの作者の六首はみなウインドサーフィンの歌。まだ一年目とのことだから、海面をすべるといふ感覚をはじめ、すべての体験が新鮮に感じられるのだ。サーフィンの短歌はまだそれほど多く作られていない。今年の夏も挑戦して名歌を世に問うてほしい。

十三年働きたる我十四年経ちたる洗淨機タインダまた故障せり  
高橋 秀

自分と同じぐらいの期間働いている機械が「また」故障した、という。「また」にアクセントがおかれているのが読者にも分かる。数詞をうまく使って、ユーモラスな味を出して成功、と見るのがいいだらう。ユーモアの方向へ行かないと、意味内容から、くらしい歌になってしまう。

実習の模擬病室に我を待つ幼女のマネキン笑みを浮

## 短歌の現在

No.483

## 今月の15首を読む

### 佐佐木幸綱

かべて

看護学習の現場に取材した作。現場がもつリアリティをベースにして、ふっと息を抜いたような下句が楽しい。読者の心に投影される「幼女のマネキン」のイメージが自在にはばたけるからである。

駅前に出現したる銅像は縫目だらけの顔持つ男

関沢由紀子

西武線の東久留米駅前に三月に立った手塚治虫の漫画のキャラクター、ブラックジャックの名前、駅の名前を出さないで、不思議をただよわせる工夫。あらためて考えて見れば、不思議な、変な銅像なのだから。

甲板に出れば鴉が横切つて真横から見る天橋立

廣間菜月

下句「……真横から見る天橋立」が読者を「えっ?」と思わせる。私も横から見たことがない。遊覧船で天橋立を見ているだけで、ことさら新しいことでも珍しいことでもないのだが、表現としては珍しい。

パスワード忘れたときに通けくもよみがえりくる母

の旧姓

武藤義哉

何十年間も思ったこともない「母の旧姓」。パスワードとして「ほぼ関係のない関係」に思い至った頭脳の体操。不思議な内容を歌にしたアイディア。

古希すぎし吾の最後の新車くる五月まだまだ先のこ  
となり 中村清美

この歌の下句は、前田夕暮の有名な一首「木に花咲き